

パトリク・オウジェドニーク著

エウロペアナ

二〇世紀史概説

この本を手を取るのほど
のような人だらう。書店の
棚や著書略歴などを手がかりに何らかの創作物、おそらく小説のようなものだろうと判断して手に取る読者もいるだろう。何の本か見当もつかず、「まあ、とりあえず覗くか」と扉を開く人もいるかもしれない。いずれにしても、明確なターゲットを胸に抱く人は比較の少ないはずだ。

「このむずむずする感じはきつと解決されるはずだ」というあまり根拠のない期待を抱きつつ、じわじわと読み進める。一四〇頁程度と決して分厚い本ではないだけに、「もう半分まで来てしまった……」と愛をな安も抱いたりもする。

この苦

この苦みはいったい何か

遊びというにはあまりに毒の強い作品

る対象、すなわち二〇世紀のヨーロッパの歴史そのものに由来するからである。チェコの作家パトリク・オウジェドニークの手になるこの『エウロペアナ』という一風変わった書物は、二〇世紀史概説という

を中断したくなるクロテスキな描写、しばし虚栄を見あげてしまう苦みを含んだ——解釈に困るような——

果たしてここにはテーマなどあるのだろうか。力点



四六判・146頁・1900円
白水社
978-4-560-09035-0

まるで車輪の両輪のように互いを支えてきたのである。何という不思議な光景だろう。人は一方で逃げ場のない苦境へと自らを追いつ込みながら、他方で、広大な自由を求めてきた。神経症と鬱病という二つの病は、まさにこのような現代人の矛盾した二つの心的傾向から生まれた病なのである。

江戸時代、『伊勢物語』は一大ベストセラーであった。公家・大名から庶民に至るまで、みやびな昔男の一代記を大いに楽しんでたようだ。現代においても代表的な古典として教科書ぶ片桐氏の『伊勢物語』研

きによる考證に『平集』との關係の三段階の『伊勢物語』かなる文藝的に及ぶ。『千載』資料となつたられる第一次は、現実を超の浪漫精神を種の伝奇小説二次『伊勢物語』を包摂しつ

『エウロペアナ』の筆法は、連想法である。興味の赴くまま、注意の引かれるまま語りはとどめなく展開し、ときにあやしげなものも含む数値やステレオタイプが次々と示される。明かに必ず採られて重要視されてはいるのだが、大抵はいくつかの有名な章段に断片的にふれるだけで通読することとはなく、受験勉強の頃の記憶の片隅にかりうじて残っている程度であろう。

片桐氏と言へば王朝文学研究の泰斗として揺るぎない存在で、多岐にわたる業績は質・量ともに他の追随を許さぬものがあるが、

思

阿部公彦

なぜか誘惑的でもある。——
のために、ついつい頁をめ
くってしまふ。おそろひに
れは激烈な読書ともならな
いだらう。引きちぎるよう
に、書物を丸裸にせんばか
りの勢いで読み進められる
のではなく、本が言及す

ところが、行けども行け
ども「このむすむすは何だ
？」という、いやらしい宙
づり感は解消されないのだ
ある。というのも、この感
覚は本書の書かれ方からく

何食わぬ副題が示すようにはあるのか。いったい何がある。語の手はいったいどこに、第一次大戦と第二次大戦の間を行きつ戻りつしながら、データを駆使して歴史的俯瞰を行ってみせるものか、と見える。兵士の身長のかと、犠牲者の数、新兵と長とか、

はあるのか。いったい何がある。語の手はいったいどこにあるのか。少なくとも通話題の芯には、暴力と欲望がある。人間が人間に對してどこまで無神経になれるか、ナチスドイツによる大量殺戮をはじめ、さまざま

読してわかるのは、世界の縮図としてのヨーロッパが、関係性の網の目にとらわれた、迷路のような運命を生きてきたという事実で

器の効き目、捕虜の残虐な扱ひなどどちらこちらと小出しに示しながら、細部から組み立てるノンフィクションの手法が装われる。

な残虐さがただただ列挙される。と同時に、人類がいかに生存欲や性的、物質的な欲望を満たすことで幸福になろうとしてきたか、その強い作品だ。こんな本が

だが、どこまで行ってもあるのは妙な細部やエピソードばかり。思わず「へへ」と鼻で笑ってしまうジョークや、一瞬、読み進めるの

のあくなき希求の跡も淡々ととらわれる。二〇世紀は幸福追求の世紀であり、かつ、血塗られた暴力と不幸

（阿部賢一・篠原琢訳）（あべ・まさひこ氏「東京大学准教授・英米文学専攻」

片桐 洋一 著

江戸時代、『伊勢物語』る。

は一大ベストセラーであった。公家・大名から庶民に至るまで、みやびな昔男の二代記を大いに楽しんでたようだ。現代においても代表的な古典として教科書に必ず採られて重要視されているのだが、大抵はいくつかの有名な章段に断片的にふれるだけで通読することとはなく、受験勉強の頃の記憶の片隅にかろうじて残っている程度であろう。

『伊勢物語』が必ずしも現代人に親しまれる古典になっていないのは、その魅力を伝え得る注釈書や解説書がなかったことが一因ではなかろうか。『伊勢物語』とはいかなる作品なのか、読者にどのようなメッセージを発信しているのか、作品全体を取り上げ、原文を読み解きながら明快に示してくれる注釈書があれば、『伊勢物語』の価値を多くの人に理解してもらえるのに、残念ながらそういう書物は存在しなかったのでは

このほど刊行された片桐洋一著『伊勢物語全読解』は、そんな渴望に答えてくれる絶好の注釈書である。そこには、半世紀以上に及ぶ片桐氏の『伊勢物語』研究の成果が存分に披瀝されている。

片桐氏と言えは王朝文学研究の泰斗として揺るぎない存在で、多岐にわたる業績は質・量ともに他の追随を許さぬものがあるが、『伊勢物語』は常に氏の研究の中心にあったと言ってもよい。『伊勢物語』の研究『研究篇』（昭和43年

明治書院）にまとめられたいわゆる三段階成立説は、学界に大きなインパクトを与えた。それは、現存する『業平集』諸本がそれらの編まれた当時の『伊勢物語』の姿を伝えていると仮定すると、何段階にもわたる『伊勢物語』の増補・成長の過程が見えてくるといういわくわけて斬新な見解であった。緻密な文献学的手続

代記的構成を昔語りという立した。第「語」になるとざる古歌や薨れ、色好みの打ち出すように変容するのは、あて、心のちにしてゐる。りわけ状況でも「変わ

文学

苦
術

★パトリック・オウジエド
ニーク（一九五七〜）
は作家。プラハ生まれ。
パリ在住。著書に「偶然
の二瞬、一八五五」など。

坂田 薫子著

脇役たちの言い分

ジェイン・オース

ジェイン・オースティンの